

第49回 Café プレイエル 定例コンサート

渡辺 しおり ソプラノ 連続演奏会 ピアノ 中山 博之

～ アンティークピアノの響きにのせて～



Vol.1 2015 3/15(日) 14:00 開演

◆◆ 山田耕筰 没後 50 年記念 ◆◆

あゝ甘し、あゝ楽し、あゝうれし

～ 山田耕筰の調べ



使用ピアノ プレイエル PLEYEL No.174215 1923年 in Paris
エラルー ERARD No.95463 1909年 in Paris

Café プレイエル&ギャラリーやましろ

山田耕筰 (1886～1965)

東京出身。医師でキリスト教伝道者の父の下に生まれる。幼少より音楽に興味を示した彼は、少年時代のピアノとの出会いを次のように回想している。『自宅の近くの三番館という屋敷から流れる音は讚美歌ではなく、数千の星を銀盤の上のころがしたような美しい音である。私の小さい胸はその妙音に驚き、臆病な私も、その音楽が聞こえ出すと、日が落ちていても家を走り出した。そして音楽が消えてなくなるまで、茫然と聞き惚れていた・・・ある日姉に〈あれもオルガンか?〉と訊ねると〈あれはピアノだ〉と教えてくれた。』耕筰は、後年「あのピアノの音が私を作曲家にしたのだ」と言っている。その後10歳の時に父を亡くし、その遺言で、自営館という夜学校併設の印刷工場に入り13歳まで働き苦学した。ひどい労働環境だったようで次のように回想している。『工場で職工に足蹴りされたりすると、私はからたちの垣根まで逃げ出し、人に見せたくない涙をその根方にそそいだ。そうしたとき、畑の小母さんが示してくれる好意は、嬉しくはあったが反ってつらくも感じられた。漸くかわいた頬がまたしても涙に濡れるからだ。』(自伝 若き日の狂詩曲)その後姉の夫であるE・ガントレットに西洋音楽の手ほどきを受け、東京音楽学校の声楽科を卒業、ベルリン音楽学校の作曲科に留学する。日本人初の交響曲を作曲するも、今一つ成果を感じられずにいたところ、日本へ帰国の途上、モスクワに立ち寄った際、学生が弾いたスクリャーピンの『詩曲』に強い衝撃を受ける。『スクリャーピンの音楽。それは私を烈しく撃った。が、彼の描く音楽の世界には、なぜか私自身も住めるような気がするのだ。その音のなかには私の顔も映るのである。』(自伝 若き日の狂詩曲)この経験から、再び音楽に邁進する決意をした耕筰の帰国後の活動は目覚ましいものであった。日本最初のオーケストラ、東京フィルハーモニー管弦楽団を組織したり、オペラ活動を始める等、多角的交友と世界的視野に立った広範囲な活動は、洋楽のあらゆる分野にわたり、盛んな創作を続けた。そのような中で最も代表的分野は芸術歌曲である。三木露風や北原白秋との共作により、数多くの優れた芸術歌曲を残し、「日本歌曲の王」とも言われた。山田耕筰の生涯は、日本の洋楽界の黎明期を拓き、明治、大正、昭和と日本の洋楽をリードし続け今日の水準にまで引き上げるという驚異的なものだった。



プログラム

北原白秋 詩	芥子粒夫人 (ポストマニ)
	1 綺麗な綺麗なちびネズミ
	2 王様お馬で通られる
	3 今は御殿で女王様
	4 とても不思議な緑の芽



〈ピアノ・ソロ〉 スクリャーピンに捧げる曲

- 夜の詩曲
- 忘れ難きモスクーの夜

ピアノのための“からたちの花”

《 休 憩 》

三木露風 詩	夜曲	
	唄	
大木惇夫 詩	ばらの花に心を込めて	
永井 隆 詩	南天の花	
	しろばらの(永井隆博士 辞世の句)	中山博之 編曲
北原白秋 詩	からたちの花	
	この道	中山博之 編曲
	“AIYANの歌”より 曼珠沙華	

日本古謡 / 山田耕筰 編曲	さくらさくら
北原白秋 詩	松島音頭
北海道民謡 / 山田耕筰 編曲	忍路高島 (松前追分)
三木露風 詩	“風に寄せてうたへる春の歌”より たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ